

秘書検定で基本的なビジネスマナーを身に付け、知識や教養の醸成も目指す

福島県立福島商業高等学校

(福島県福島市)

福島県立福島商業高等学校では、「信義」「全力」「不撓不屈」の校訓の下、豊かな心を持って地域を愛し、地域に貢献できる人材の育成を目指している。資格取得に意欲的な生徒が多く、秘書検定も目指す目標の一つとして、毎年約50人が挑戦する。さらに授業では、幅広く社会人としての常識や教養の醸成も目標としている。授業内での指導について伺った。

意欲の高い生徒たちに基本となるビジネスマナーを体得させる

福島県立福島商業高等学校は、福島市のシンボルである信夫山や阿武隈川の支流松川などの雄大な自然が広がる土地に校舎を構える。連続テレビ小説「エール」の主人公、作曲家古関裕而の母校としても知られており、2025年には創立128年を迎える。

全校生徒は約700人。情報ビジネス科、経営ビジネス科、会計ビジネス科の3学科があり、商業全般にわたる知識やスキルを身に付けることができる。生徒の進路は進学が7割で、就職は3割。就職先の多くは県内の企業であり、卒

業生は地域振興の一端を担う存在だ。学校全体で、卒業後に即戦力となる人材を育てるべく、入学後からビジネスマナー教育には力を入れている。生徒自身も就職・進学を問わず資格や検定に対する意欲が高いことが特徴だ。

秘書検定の取り組みは3年次、経営ビジネス科の選択科目「ビジネスコミュニケーション」と、全学科共通の「課題研究」内の選択科目「ビジネスリテラシー」で行っている。どちらも就職活動などと並行しつつ、6月に3級、11月に2級の合格を目指すタイトなスケジュールだが、生徒からの人気は高い。課題研究では毎年多くの生徒が希望するため、受講に条件が設けられるほどだという。

同校で秘書検定の指導に当たる佐藤みゆき先生は、前任校でも長らく検定指導を経験しており、その重要性はよく理解している。

「就職を目指す生徒はもちろん、進学する生徒も受験では面接があることが多いため、基本的なビジネスマナーの習得は必須です。社会に出た後も役に立つスキルなのでぜひ生徒には身に付けてほしいと思っています」(佐藤先生)。

昨年度は「課題研究」で15人、「ビジネスコミュニケーション」では32人の生徒が秘書検定に挑戦した。

「3級は基本的に座学です。過去問を生徒に配布して宿題として取り組んでもらい、授業で指名して解答させた後に、私が解説しています。授業回数は多くありませんでしたが、もともと



福島商業高等学校校舎。
OBである古関裕而の野球殿堂入りを祝う垂れ幕も



秘書検定の指導を行う佐藤みゆき先生。
長年福島の地で検定指導に当たっている

検定試験に対して意欲的な生徒が多かったため、高い合格率が出て安心しました」と指導を振り返った。

秘書検定の学びだけでなく さまざまな教養の醸成を

佐藤先生の授業ではビジネスマナーを知識として学ぶだけでなく、社会人としての立ち居振る舞いや教養も併せて身に付けさせることを重視している。そのためハキハキとした話し方や字の美しさなど、さまざまな角度から授業を展開しているという。

相手に伝わる声の出し方や、人前で話すことへの苦手意識克服も、毎回授業内で自然に行われている。

「授業では毎回必ず、最低でも一人一回は声を出す機会を設けています。問題文を読んだり発表をしたりと機会はさまざまですが、声が小さい生徒には厳しく指導をすることもあります。人前ではつきりとした声を出すことに慣れてほしいからです。『課題研究』では3学期に大勢の前で、学んだ成果をまと

めた研究発表をすることになります。毎年、生徒はその頃には見違えるほど成長してくれます。選択授業という特性上、他クラスの知らない生徒と関わる機会も

増えるため、コミュニケーションスキルが自然に高まるようです。知らない生徒と仲よくなれたという報告も多く、こちらとしてもうれしい気持ちです」(佐藤先生)。

幅広い知識や大人としての教養は佐藤先生が特に意識する部分だ。

『課題研究』では授業内容を教員が自由に設定できるため、いかにして生徒に常識や教養を身に付けさせるか、工夫を凝らしています。例えば、私が取り入れているのは硬筆や書道です。社会に出てからはもちろん、学校でも日誌を書く機会があります。その時に読みにくい文字や、筆圧が弱い字しか書けないとなると問題です。なかなかすぐに上達するものではありませんが、常に丁寧を書くという意識を持つて取り組むことが大切なのです。回を重ねるごとに生徒からもその意識は伝わってきます。ボールペンだけでなく万年筆の使い方も教えています。昔と違い、万年筆自体を初めて触るという生徒も多いので、ここでは書き方だけでなく、万年筆の歴史から解説、指導をしています。教養としての取り組みです」(佐藤先生)。

さらに一風変わった取り組みに「百人一首」を活用した調べ学習がある。生徒が一人一首を選び、調べた内容を発表し、その内容や発表の様子を他の生徒たちが評価するのだ。人前での発言や他人を評価することに慣れさせるだけでなく、文化的な教養も身に付けさせる狙いだ。こうした取り組みは佐藤先生自身の学生時代

の経験から行っているものだという。

「私自身が学生時代に受けて印象的だった取り組みを、生徒にも経験してもらっています。私の出身校では、小中高どのタイミングでも『百人一首』に触れる機会がありましたが、今の生徒にとってはこれも新鮮な体験のようです。初



生徒に大人気の坊主めくり。

ALT (Assistant Language Teacher) が一緒に参加することもあり、毎回とても盛り上がる

経営ビジネス科「総合実践」の授業。
どの授業もきちんとあいさつして始まる

面接指導では、生徒が生徒に
評価をつける



佐藤先生の授業を受け秘書検定に挑戦した生徒たち。
(左から) 経営ビジネス科の國分海人さん、阿部ちづるさん。
会計ビジネス科の太田凜々さん、情報ビジネス科の小島悠希さん



多様な取り組みの中で 役立つ知識が身に付く

創意工夫を凝らした佐藤先生の指導により、生徒たちは日々成長を続けている。

経営ビジネス科の阿部ちづるさん、國分海人さんは「ビジネスコミュニケーション」・会計ビジネス科の太田凜々さん、情報ビジネス科の小島悠希さんは「課題研究」の「ビジネスリテラシー」で秘書検定に挑戦した。

四年制大学への進学が決まっている阿部さんは「将来は接客の仕事を希望しています。人と

めは歴史的仮名遣いの読み方や句切れなどの理解も難しいようでしたが、今では坊主めくりで毎回大盛り上がりするほど興味を持ってくれています。学生時代に出合う新鮮な体験はその後の人生でも財産になります。秘書検定の勉強に加え、さまざま

スムーズにコミュニケーションを取るために、秘書検定が役に立つと考えて選択しました」ときっかけを語る。「言葉遣いや気遣いなどは日常の場面にもすぐに取り入れることができた。進路について先生と話す際にも、正しい言葉を使えるようになりましたし、受験対策の面接の練習でも、基本的な声の大きさやお辞儀の深さを身に付けることができたので、将来の就職活動に生かしたいです」。

國分さんは「就職を目指して入学したので、ビジネスマナーが学べるよい機会だと思い選択しました。席次や上司とのやりとりなど、新しい発見が多くて楽しかったです。3級試験と就職活動が同時期だったので、かなりハードなスケジュールでしたが、これも成長につながると思い、積極的に乗り越えることができました」と振り返った。

「母が秘書検定を持っていたので、自分も受けてみようと思いました」と話すのは太田さん。春からは専門学校に進学し、将来は動物看護に携わる仕事を目指す。「先輩や上司との接し方や敬語について深く学ぶことができました。お客さまに対して使う接遇用語など覚えるのが難しいものもありましたが、将来自分のやりたい職業に必要なスキルなので、今後も生かしたいと思います」。

小島さんは「卒業後は就職が決まっています。社会人として立ち会うさまざまな場面で見られる、正しい行動や振る舞いを事前に身に

付けられてよかったです。入社後はたくさん先輩に囲まれて働くことになるので、検定で学んだ気遣いを生かしていきたいです」と卒業後の展望を語ってくれた。

最後に、さまざまな取り組みを行う佐藤先生の授業についての感想を聞いた。

「以前は人前で話すとき、とっさに言葉が出ないことも多かったのですが、佐藤先生の授業を受けて、いきなり話を振られてもきちんと自分の言葉で話せるようになりました」(阿部さん)。「百人一首など、未体験の教養や文化に触れることができて楽しかったです。知らない分野について自分で調べて発表することは、将来プレゼンテーションの機会にもつながる部分だと思うので学べてよかったです」(國分さん)。

「人前で話すことはずっと苦手。正直、今も強い自信は持っていませんが、授業を通して意識はかなり改善できたと思います」(小島さん)。

「授業で初めて万年筆を触りました。きれいな字の書き方も含めて、まだまだ手書きの機会はあると思うので、今のうちに学べたことは自信になります。また、もともと人前で話すことは苦手でしたが、3年間の学校全体としてのビジネスマナー教育や、秘書検定での学びを通して、人と積極的に話せるようになってよかったです」(太田さん)。

マナー、常識、教養、文化。さまざまな分野に触れて成長した生徒たちは、今後地元への、そして未来の発展を担う優秀な人材になるだろう。